

書 評

伊藤安男 著

『洪水と人間—その相剋の歴史—』

古今書院 2010年1月

170頁 4,000円+税

「水防意識の昂揚」、という歴史地理学の洪水研究史の到達点をさらに1歩乗り越えた研究、それが伊藤安男氏による『洪水と人間』である。本書のタイトルは、氏の「あとがき」によれば、伊藤氏が1954年に新任高校教師として海津市の高校に赴任された時に出版された『輪中—洪水と人間その相剋の歴史—』（学生社）、そのものである。とはいえ、単なる復刻改訂版ではなく、この50年間に氏が輪中に住み体験・思索された氏自身の治水思想を主張した新たな書物に生まれ変わっている。伊藤氏の治水思想とは、氏自身の言葉を借りれば、「洪水常襲地域の流域住民が度重なる水害に対して歴史的にいかなる対応をとってきたのか、いうならば治水と水防との相関の肝要性を強調すること」である。

二部からなっている本書の章構成は次のとおりである。

第一部 現代によみがえる治水思想

- 第一章 御囲堤の真実—尾張と美濃の相剋
- 第二章 近世城下町と差別的治水策
- 第三章 新規に構築された囲堤集落
- 第四章 洪水常襲地の変容とその住民対応
- 第五章 治水工法からみた輪中の現代的意義

第二部 木曾三川流域の治水誌

- 第一章 蘭人工師デレーケの治水思想
 - 砂防を中心として—
- 第二章 水屋・水塚・段蔵
 - 日本各地の防水建築—
- 第三章 濃尾平野の形成と河道変遷
- 第四章 輪中地域の外水災害とその住民対応
 - 大垣輪中を中心に—
- 第五章 悪水をめぐるとの対立と慣行
- 第六章 輪中と悪水湛水
- 第七章 輪中を支えた水防意識

歴史地理学のオーソドックスな研究手法、歴史的な資料の収集、絵図・地形図の活用、そして現

地調査、この3点を総合させた分析がベースになっているだけに、本書の様々な個所で提言されている治水対策に説得力がある。それに、過去の歴史的事実を忠実に復元するだけでなく、章節に出てくる、「現代によみがえる」とか「現代的意義」という言葉から察せられるように、本書が過去に学んだことを現代に活かそうという著者の強い意図が読み取れる。

各章の順を追っての概説は割愛して、著者を支えた「水防意識」を読み取ってみたい。著者は本書で一貫して、第二部第二章の「防水建築」を除いて、「水防」という言葉を使っている。『日本国語大辞典』（小学館）を引いて、水防は「洪水や高潮などに際して水害を警戒、防御し、またその被害を少なくすること」、防水は「出水を防ぐこと、水の流入をふせぐこと、水がしみこまないようにすること」とある、として建築に限って「防水」を冠している。評者なりに上記の定義を解釈すれば、防水の「出水をふせぐこと」はいいが、「出水を完全に防ぐことはできない」と言うのは歴史的事実であり、完璧な築堤を作るという発想は20世紀的思想であり、むしろこれからは「洪水・高潮の発生はとめられない、出水は防げない」とさとり、「被害を少なくする」という「水防」思想で治水対策をすべきではないか。それが21世紀型洪水対策であり、その思想の実際が輪中で経験されてきたのである。伊藤氏は「水防」をパーシプティと受け身的に使われているが、決してそうではない、非常に重いメッセージ性をもった言葉である。

この「水防」を念頭に置くと、本書の内容が生きてくる。第一部で、その歴史が「御囲堤」・「輪中」を主役に語られているし、第二部では治水対策の実践としてオランダの技師の思想が語られ、たび重なる大水害に遭遇してきた輪中地域の住民の水防意識が示される。以下、御囲堤・輪中とデレーケと住民の水防意識の三点に焦点を合わせ、本書を読みなおしてみたい。

集落を防御する輪中堤は囲堤ともいわれるが、それに「御」がつくと、公権力の色合いが濃くなる。尾張藩は名古屋城側の領域を洪水から守るた

め慶長年間(1596-1615)に木曾川左岸に強固な連続堤である御囲堤を築造した。「美濃の諸堤は御囲堤より低きこと三尺たるべし」といわれている差別的治水堤であり、実際、美濃側の破堤、洪水は尾張側の比ではなかった。美濃側でも大垣城下を守るための大垣藩の御囲堤が造られており、美濃の農村部は二重の打撃を受けざるを得なかった。

「御囲堤」の研究動機が面白い。名古屋城下を守るために美濃側の堤防を低くしたという「御囲堤」に対して、「強大な御囲い堤をつくったというのは眉唾もので、誰かが徳川幕府批判の立場から明治の初めにそういうことを言いだした……」というような説に対して、伊藤氏は憤然として反撃を開始した。尾張と美濃の実例(第一部第二章)だけで満足することなく、全国各地の城下町、津山、彦根、大垣、福井、福山、三条などで、このような差別的治水策がとられていたことを実証した。

城下町ではないが、洪水に遭遇した際の隣接する二つの輪中の被害差が興味深い(第一部第三章)。森部輪中を中心とする安八町はインフラ整備による工場の進出などにより、すべての輪中堤を取り壊し、農地の宅地転用率が昭和35年(1960)から45年の10年間に5倍となった。片や長良川下流に南接する福束輪中の輪之内町は輪中堤を残し、農業的土地利用を温存していた。そこに昭和51年の長良川本流の破堤。前者で多大な犠牲者が出て、後者は助かった。「輪中は生きていた」といわれた。

堤で囲われた者が助かるということは、堤の外の者が犠牲になるということである。その歴史的葛藤が記されているのが第二部の第五章と第六章の「悪水」論である。

江戸期の低湿地、輪中地域では「水はけの悪い水田のたまり水などで作物の成育に害になる水」のことで、用水に対して排水される水と理解すべきである、と伊藤氏は規定する。この悪水をめぐって高位部と低位部の輪中、さらに同一輪中の高位部と低位部の村々が対立抗争する例はきわめて多かった。これが輪中特有の水争いであったという。水損不作となった下流の人々の知恵で、窮状を克服するために考案されたのが「堀田」の造成である。伊藤氏による大垣市浅草地区の地籍図

から復元された堀田図(158頁)をみると、その数に驚かされる。評者が、蛇足ながら付けくわえておきたいのは、堀田よりさらに数十センチ高所に造成された「島畑」である。堀田が水没しても助かる島畑は、明治中期の地籍帳によると、その地価が水田よりも高くなっている。堀田といい、島畑といい、悪水を克服するだけの土地利用があったことは強調しておきたい。

さて、デレーケの治水に関して、木戸孝充をもちだして、著者は興味深く紹介する(第二部、第一章)。

オランダ人の招へいについて、当初より反対したのは木戸孝允であった。その理由はうなづける。「……蘭国二山ナシ、急流ナシ……」。しかし、木戸は説得されたようである。オランダの植民地インドネシア。山岳地帯のその国へオランダの技師たちは出向き、火山灰地域での砂防工事を敢行するなど、治山重視の治水を学び、実践した。その技術が日本に導入され、技師たちは、日本の山地に次々と砂防工事を施工していった。デレーケの功績は彼らの手による土木工事施工のみではなく、日本人技師育成に尽力したことである。その育成は、日本人技師にジャバ島視察をさせていることから、単なる技術だけでなく、現場重視の観察と治山治水思想を植え付けたことにある。もうひとつデレーケの功績を付け加えれば、時の政府を動かした点にある。内務省は明治12年(1879)12月に、木曾川流域の土砂防止のため「山地作業ノ取締」を厳達し、翌年1月に「山地諸作業取締ノ件」を布告し、さらに14年には焼畑禁止令を通達している。そして同年木曾川流域砂防工費の増額を決めた。また、木曾川上流の村々が自普請で砂防工事を施工したことに対して、これらの村々には内務大臣より表彰すべきであると、讃えている。

こうした技術者・官・民一体となった土砂工事が養老山地より始まり木曾三川の上流部へと進められていった。伊藤氏自らがデレーケになりかわって、木曾三川の上流部にてかけ砂防工法の堰堤を確認した写真を載せている。過去の事績を文書分析のみに終わらせず現場へのフィールドワークで議論する、という姿勢が本書の随所で現れており、歴史地理学の書としての魅力になっている。

このデレーケの思想は、上下流のバランス重視

という点で、現在になっても生きている。平成13年(2001)から実施されることになった水防災対策特定河川事業は、「洪水被害がたびたび生じているにもかかわらず、上下流バランスの理由から早期の治水対策が困難である河川の特定区画において、一部区域の氾濫の許容を前提とし、住家を輪中堤の築造、宅地の嵩上げ、河川沿いの小堤の設置等の方式で洪水による氾濫から防御すること等により、より効果的かつ効率的な治水対策を促進し、もって安全で豊かな地域づくりに資することを目的とする」(76, 77頁)。ただ、問題なのは、氾濫を許容した地域に宅地造成し、洪水の危険を知らない人々が入居してしまうことである。こうした地域への住宅規制は今まで以上に強化すべきであろう。

さて、木曾三川の分流工事(宝暦治水)やデレーケの治水工事、御囲堤、それぞれの地区での輪中堤、明治以降の堤防護岸工事などによって、洪水はなくなったのか、という現実は厳しく、水害被害は後をたたない。その元凶は二つある。高水位工法とそれに伴う住民の水防意識低下である。その部分を引用しよう。「……それが明治以降より近代化という名のもとに低水位工法から高水位工法へと移行した。このハードな連続堤による治水の進行は、スローテンポながらも治水即工事という治水思想を流域住民に浸透させていった。それとともに住民の水防意識は低下していった」(59頁)。伊藤氏は都市的土地利用の進んだ安八町の森部輪中でのアンケート調査で、「水害の危険性があると思う人」は少なく、「水防活動要請に仕事を休んで参加する人」も少なくなった、と水防意識の低下を嘆いている。

参考までに、岐阜地理学会・名古屋地理学会での基調講演「防災に果たす地理学」(2009)での伊藤安男氏の語る興味深い、深刻な話を載せておこう。「水災害は天災ではない、人災である。……水防団がある水防倉庫へ行ったところ、中は空っぽであったと。水防資材は一切なかったと。じゃあ次の水防倉庫へ向かったところ、鍵がかかってい

る。その鍵は区長が持っているから、区長の家へ行ってくれということで、水防団の方が区長の家へ行ったら、その鍵は持っておらんと」。地域全体で水防意識の低下が進んでいるようである。

われわれは、ハザードマップを作る。その際、水防倉庫のある地区は、安全度が高いと示す。でも実際は、上記のようなことが起こる。それゆえに、本書はしがきで伊藤氏が願った「この小書が読者諸氏の水防意識の昂揚の一助になれば幸いである」という言葉は重い。

郷土をこよなく愛し、郷土史研究を学問的水準に高め、そして住民のために水防意識を持つよう主張した伊藤安男氏の本書は、研究者のみならず地元住民、行政等様々な人々に多大な知恵を与えるであろう。ここでは本書を含む氏の研究に触発された評者の現在取組中の研究課題を2点あげておきたい。一つは「洪水常襲地における21世紀型水環境社会の構築」(科研B, 平成21年~24年)である。この主要対象地はバングラデシュであるが、比較地として木曾三川地域を入れた。輪中独特の避難家屋の「水屋」はバングラデシュのバリ(屋敷地)へ輸出できそうである。他の一つは名古屋大学附属図書館に所蔵の高木家(木曾三川の普請奉行)文書の中の絵図群の整理・分析である。伊藤氏が本書口絵に載せたカラー絵図に類似する河川絵図が大量に残されている。江戸時代における堤防決壊箇所記載図、上流部村落と下流部村落の対立水論図など水防研究に役立つであろう。

結びとして、あえて今後の研究課題を伊藤氏に託すとすれば、御囲堤で差別された側の、大洪水時の住民の生活誌と精神的風土の解明であろう。幸い本書にも「際限なく破堤を繰り返すことは、輪中住民にとっては悲惨そのものである。この哀しい願いを神に託す精神的風土が水神信仰となっていく」(148頁)といった記述があり、悲惨さを乗り越えてきた住民の知恵が多数あると思うし、伊藤氏からさらなる教を乞いたいと思う。

(溝口常俊)